

第200号記念にあたって



日本曹達株式会社農業化学品事業部長

辻川 立史

Tateshi Tsujikawa

昨年は、農業行政上大きな節目となる一年となりました。農業の競争力強化を目的とする農業競争力強化関連法が成立、農業取締法の一部改正もなされ、農業の6次産業化や農産物の輸出振興に向けて大きく舵が切られました。このような大きな変革が進む中、本誌、農業時代は1954年（昭和29年）4月20日の創刊（図1）以来65年、発行部数累計120万部を超え、ここに第200号の発行となりました。第1号の冒頭では、国民生活の本質として食料自給率を高めることの必要性和、それに伴う病害虫防除の一助としての農薬の意義が述べられ、当社としてこの重大意義に取り組む決意が記載されております。これは、現在にも通じる基本精神として累々と引き継がれ、農業化学品事業は当社にとっての大きな柱となっております。昭和から平成を経て新たな元号に代わる節目となる年に、第200号を発行することができましたのも、刊行の主旨にご理解を賜り、快く執筆を引き受けて頂きました農林水産省をはじめとする多くの関係機関や企業の方々のご協力と、ご愛読頂きました読者皆様、その他多岐にわたる関係各位のお蔭であると深く感謝申し上げます。

近代化学産業が発展する過程においては、農業メーカー各社は競って新規化合物の合成探索を行い、新製品を開発してまいりました。新規化合物の開発は年々困難なものになっておりますが、各社は“SDGs”などのキーワードのもと、社会貢献に資する新製品、新技術の開発やコスト削減に向けてしのぎを削り、農業生産における技術革新も目覚ましいものがあります。マルチナショナルと呼ばれる大手企業は、もはや化学農薬の創製にとどまらず、IT農業・スマート農業などと称される農業生産管理技術の精緻化に伴う省力化や生産性の向上、さらに

はゲノム編集技術等による品種改良などにも取り組んでおり、近未来の農業は大きく様変わりしていることでしょう。植物防疫の分野におきましても、従来の化学農薬一辺倒から、生物農薬や耐性品種の導入などの技術を複合的に組み合わせた高度な防除体系が出来上がってきております。しかしながら、技術革新がいくら進んだとしても、農業生産の原理原則は不変であり、農薬の使用場面では、栽培管理や病害虫防除の基礎知識の上に、使用するそれぞれの製品・技術の特長や安全性、使用上の注意点等を正しく把握することにより、効果的な適用が可能となります。一方、近頃の情報収集手段はインターネットでの検索が主流となっております。素早く適格な情報を得るという目的では、ネット検索は便利ですが、印刷物には印刷物ならではの良い点も多々あるでしょう。そこにあるからちょっと手に取る、じっくり読み込む、普段見落としがちな話題に出会う、思わぬエピソードも目に留まる、出版物としての本誌の有用性には変わりはないと考えております。

農業時代の編集に際しましては、当社製品の解説にとどまらず、農薬の製造者、農業生産技術者、農薬の使用者など農薬に関わる多くの人々を結びつける内容を意識し、農業生産の向上に貢献するべく正しい知識の普及に努めてまいりました。また、1975年126号から掲載が始まった「途中下車」は、専門的な記事の中にも試験研究に携わっておられる方々の趣味や旅行記、農産物のよもやま話など、日々の随想録を綴っているコラムとして好評を博してまいりました。これからも、ビジュアルで多彩な有用情報満載の利用価値の高い内容を目指してまいります。日本の農業が大きな転換期を迎える中、農薬に対しましても様々な点で世間の厳しい評価の目が向

けられております。当社といたしましても、農薬メーカーとしての社会的責任の重さを真摯に受け止めながら、その使命を果たすべく全力で取り組んでまいり所存です。「農薬」という単語そのものの是非、代替用語を要望される声も時に耳にする昨今ではありますが、「農薬時代」という誌名の歴史をかみしめ、

食料生産に貢献してきた「農薬」に対する矜持を持って新しい時代に向かいたいと思っております。最後に、本誌の末永き続刊のためにも、日本曹達の農薬への一層のご支援、ご愛顧の程よろしくお願い申し上げます。



**農薬時代の
発刊に当って**

昭和二十八年中に農家の支払った農薬代は一二〇億円と推定されている。昨年はイモチヤや二化銀虫の大発生があつたために、こんな多額の農薬が使われたので、二十九年には、果してこんなに使われるだろうか、ということが、一般、特に農業者の大きな関心であつた。しかるに今の様子では、たとえ、昭和二十九年の病害虫の発生に特に異常なものがないとしても、充分に、この位の量に使うのではないという見通しが強い。したがつて、もし病害虫のどれかが異常発生すれば、これより大きなことは云うまでもない。

農薬を沢山に使うだけが決して目標でない。しかし、結果等では、今まで決して病害虫防除が充分に行われ、農薬がフルに使われていたわけではないから、農家の病害虫防除に対する関心が高まるにしたがつて、その使用量が増加するが、当然である。また、防除技術の進歩にしたがつて、農家が病害虫から逃げないで、正面から病害虫と取組みながら、増産は経営の合理化に努力することになり、更にまた防除の共同集団化と相俟つて防除量の増加に拍車をかけることになる。

そこで、農薬の合理的な使用によつて、防除効果を確保すると共に、農薬を経済的に使うことの肝要なことは云うまでもない。なお、また農薬が従来の売上の性格の域を脱して、優秀なものが出現するにつれて、その扱い方が複雑になるので、その薬の特性をよく弄みこんで、これを完全に使いこなすことも大切である。

最近、大農業者が競つて、新聞、しおり、雑誌などを発行している。昔——と云つてもそんなに古くない頃に、数種発行されていたものは、一二の例外を除いて、そんなに有難いものとは思わなかつた。それでも、農薬技術の普及制度の発達したかつての頃には、その程度のものでも、かなり役立つたのかもしれないが、国の政は各地方の普及組織網が整備し、それぞれ立派な印刷物を出しているこの頃では、よほど特色のあるものでないと、一般から歓迎をされないであらう。

日曹は云うまでもなく、わが国の化学工業界の雄であり、その関係するところも多方面に亘つてゐるから、こうした方面の経験も多いであらうし、また、海外の技術情報入手についても、立派な手筈を持つてゐるであらうことは想像に難くない。

この「農薬時代」が、薬の性状や、合理的な使用法を農家の指導者や農家に頼りよく任されたり、われわれの知らない海外の新しいトピックスなどを紹介してくれたら、どんなに有難いかと思う。

どうか、その内容だけでなく、その編集に於ても卓抜した構想、意匠を以て、こうした出版物の一つの在り方を示して戴きたいものと思う。

この「農薬時代」が、日曹の農薬事業の偉大な業績と共にすばらしい発展をされることを祈つてやまない。

(一九三三・三〇)

農林省植物防疫課長
堀 正 侃

目 次

農薬について……………大和田徳二……………(表紙2)	
『農薬時代』の発刊に当って……………堀 正 侃……………(1)	
殺 殺 殺 虫 剤……………上 遠 章……………(2)	
黒があつて白がわかる話……………田 村 市 太 郎……………(6)	
害虫メモ1(食糧作物・これから夏まで)……………石 倉 秀 次……………(8)	
新殺ダニ剤・サツピランについて…………………………(10)	
アメリカの本から拾つた 50% DDT水和剤の使い方…………………………(11)	
新農薬メモ・海外短報…………………………(11)	
工場めぐり(二本木の巻1)…………………………(12)	
あらかると・談話室・相談室・編集後記……………(表紙3)	

図1.創刊号表紙と発刊に当って